

氏名(本籍)	まつ お なお ひろ 松 尾 直 博 (福岡県)		
学位の種類	博 士 (心理学)		
学位記番号	博 甲 第 1,773 号		
学位授与年月日	平成 10 年 3 月 23 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審査研究科	心 理 学 研 究 科		
学位論文題目	児童の社会的行動産出過程における動機づけの役割		
主査	筑波大学教授	教育学博士	新 井 邦 二 郎
副査	筑波大学教授	教育学博士	杉 原 一 昭
副査	筑波大学教授	教育学博士	田 上 不 二 夫
副査	筑波大学助教授		飯 田 浩 之

## 論 文 の 内 容 の 要 旨

### 1. 論文の目的

主な目的は、児童の社会的行動産出過程を研究する上でこれまであまり重視されなかった動機づけの役割を明らかにすることである。特に、社会的場面における動機づけに影響を与えると思われる個人特性変数、社会的場面における動機づけの重要な要素である感情・目標、および社会的行動との3者関係について焦点を当てる。

### 2. 論文の概要

第1章では、児童の社会的行動産出過程に関する理論的検討を行った。先行研究を概観して、そうした研究の意義と現時点での限界点について指摘し、動機づけを重視した新たなアプローチについて考察を行った。その結果、児童の社会性の理解や社会性に問題をもつ児童の援助法を考案する上で社会的行動産出過程についての研究は重要な意義をもつこと、社会的行動産出過程における動機づけを重視した新たなアプローチが必要なことが明らかにされた。

第2章では、児童の社会的場面における感情、目標、行動についての基礎的資料を収集し、それを基に感情や目標と社会的行動との関係について実証的研究による検討を行った。第1節(研究1)では、文章完成法を利用して、友だちと遊ぶ理由や友だちと遊んでいるときの気持ちなどの質問を行った。その結果、児童が友だちとの関係を重視しており、友だちと関わりを持つという行為が、ポジティブな感情を得る、ネガティブな感情を避けるという感情的要因、友だちとの関係の形成・維持などという友好的な目標によって行われていることが明らかにされた。また、多くの児童が友だちと接する場面でポジティブな感情を経験しており、この時期の児童にとって友だちと遊ぶという行為が、健全な精神的発達において重要な役割を果たしていることが推測される。第2節(研究2)では10の仮想の社会的場面における児童の行動、感情、行動の理由について回答が求められた。それぞれの社会的場面において、様々な感情、行動、理由についての記述が得られ、提示された10の場面における子どもの心的状態や行動の多様性が確認された。同じ場面であっても、子どもが感じる感情や行動についての理由は実に様々であり、こうした個人差が社会的行動の差を生み出していることが推測される。第3節(研究3)では、研究2の結果を基に、3つの仮想の社会的場面における児童の感情、目標、行動について測定が行われ、数量化Ⅱ類を用いた分析の結果、感情と目標という2つの動機づけ要因と社会的行動の選択との関連が認められた。これらの結果から、感情と目標が社会的行動の選択において重要な役割を果たしていることが推測される。第4

節（研究4）では、研究3と同様に、3つの仮想の社会的場面における児童の感情、目標、行動について測定を行ったが、研究3の複数の選択肢から1つの感情、目標を選択させる方式から、複数の感情、目標についてその程度を評定させる方式に変更した。その結果、異なる行動を選択した群間では、多くの感情得点、目標得点に差があることが認められた。感情と行動の測定を選択肢方式から、評定方式に変えても、感情、目標が行動の選択において重要な影響力を持つことが明らかにされた。したがって研究3と同じく、感情と目標という2つの動機づけ要因が行動の選択において重要な役割を果たしていることが示された。

第3章では、社会的場面における感情・目標に影響を与えている特性変数を測定する尺度を作成し、「特性変数→感情・目標→社会的行動」の関係について実証的研究により検討を行った。なお、特性変数としては、先行研究において社会的行動産出に影響を与えていると指摘されている対人不安傾向、自己価値・他者価値について焦点を当てた。第1節（研究5）では、先行研究において社会的行動産出に影響を与えていると指摘されている児童の対人不安傾向を測定する尺度を作成し、信頼性を検討した。その結果、18項目からなる対人不安傾向尺度が作成され、内的一貫性が確認された。第2節（研究6）では、研究5で作成された児童用対人不安傾向尺度の基準関連妥当性が検討された。その結果、GATの対人不安傾向尺度、公的自己意識尺度、対人不安傾向に関する教師評定との間に有意な関係が認められ、本論文で作成された児童用対人不安傾向尺度の基準関連妥当性が確認された。研究5の結果と合わせて、対人不安傾向尺度が信頼性、妥当性の高い尺度であることが確認され、子どもの対人不安傾向を測定する尺度として敵したものであることが示された。第3節（研究7）では、先行研究において社会的行動産出に影響を与えていると指摘されている自己価値、他者価値を測定する尺度を新たに作成した。その結果、5項目からなる自己価値尺度、6項目からなる他者価値尺度が作成され、因子的妥当性と内的一貫性が確認された。第4節（研究8）では、研究7で作成された自己価値・他者価値尺度の基準関連妥当性、再検査信頼性の検討が行われた。その結果、先行研究で信頼性・妥当性が確認されている全体的自己価値尺度、向社会的目標尺度との間に有意な相関が得られ、基準関連妥当性が確認された。また、1カ月を隔てて行われた再検査との高い相関が示され、再検査信頼性が確認された。研究7の結果と合わせて、本論文で作成された自己価値・他者価値尺度の信頼性、妥当性が確認された。第5節（研究9）では、本論文のこれまでの研究結果をもとに、社会的行動に影響を与える感情、目標、さらにそれらの変数に影響を与えていると考えられる対人不安傾向、自己価値、他者価値を含めた動機づけ過程について検討することが目的であった。その結果、「特性変数→感情・目標→社会的行動」の関係について明らかにされ、特性変数が社会的場面における感情、目標に影響を与え、それらの動機づけ要因が社会的行動に影響を与えていることが明らかにされた。第6節（研究10）では、研究9で扱われた特性変数、社会的場面における感情・目標、行動の時間的変化を検討し、特性変数の変化と仲間との経験との関連を検討した。その結果、ほとんどの変数が6カ月の時間を経ても安定していること、特性変数の変化には仲間からの援助、合意的確認、否定的評価、存在の無視などが関連していることが明らかにされた。

第4章の全体的考察では、本論文で得られた知見を総合的に概観し、問題点、今後の課題についても触れた上で、知見の教育、臨床的活動への提供について考察を行った。本論文で得られた知見は、方法論的な限界はあるものの、児童の社会性の発達の促進、社会性につまずきをもつ子どもの介入において様々な利用可能性があることが考察された。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、これまでの心理学研究のなかで手が付けられてこなかった児童の社会的行動の動機づけの側面について、感情と目標に焦点をあてて研究し、感情と目標の両者が児童の社会的行動に影響を及ぼすことを実証的に明らかにした点において独創性が認められる。また、個人の特性である対人不安傾向や自己価値・他者価値感傾向が、社会的場面での児童の感情や目標の在り方に影響を与え、さらにその感情や目標が社会的行動自体に影響

を与えるという関連の連鎖を確認できたことも、本論文の成果である。こうした研究の知見は、今日、社会問題となっている子どものいじめなどの攻撃行動や引きこもりなどの非社会的行動を理解し、それらに対する適切な対応の仕方を実行していく際に役に立つであろう。本論文の調査は、仮想の社会的場面を作成し、その次元での児童の反応を収集したものであり、実際の社会的行動をデータとして扱っていないという限界も指摘されようが、仮想場面での研究方法のメリットも存在しており、そのことが論文自体の価値を低めるものではないと考えられる。

ただ、社会的行動には規範が明示的にせよ暗示的にせよ付きものと考えられるが、本論文の調査では、その規範を扱わなかったこと、自由記述させた社会的行動の分類の仕方として本論文以外の分類も可能であることなど、今後さらに検討すべき課題も見られる。本論文は、今後取り組む課題をいくつか残しているが、未開拓であった児童の社会的行動の動機づけの側面を解明するという初期の目的は達成しており、その学問的意義は高く評価できる。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。